

二月十日の年賀状

みずき 啓

「一徳さん（カズちゃん）どうしたかしらねえ」

暫くの間、私達三人の姉妹が顔を合わせた時決まっておた一言が、無くなってかなり久しい。

だいたいカズちゃんは、要町の町野家と同じ鹿児島出身で、姉の義母のことも

「ありやバカでどおしよもない。兄弟たちは皆ゆしゅう（優秀）なのに。あれだけがデキソコナイの我儘で、ほんとは箸にも棒にもかからんことある」などと息巻いているが、少しでも血が繋がっていると、繋がりはないが遠縁だとか、子供の頃遊んだとかの話は聞いたことがない。だいたい町野の実家は、銀行がその土地を売ってくれないかと打診に来た程の、鹿児島市の一等地。カズちゃんの実家は農家と聞いている。

勿論、カズちゃんの姉のイワイさんが、町野の竜一郎の弟、統合失調症のタイジさんと住んでいたという関係は有るのだが。鍼灸師のイワイさん（真空のコツプ様の物を患者のツボに伏せ、患部の悪血を流す治療を施すらしい）は地位の有る男たちをボーイフレンド

にしていた。

「イワイさんは優しいもの、男の人に。それに、あの仕事は一對一で密室でしょ」姉は言う。

ボーイフレンドの一人が院長をしている大病院に、彼女が治療室をもったり、別の一人の弁護士が建てた、数寄屋造りの家に住んでいた。彼等とタイジさんをどう処理していたかは知らない。

「女は最初の結婚がかんじんでね。初婚に躓くと、後は駄目よ」はイワイさんの口癖だったらしい。

一徳さんの話によると、二十歳前のイワイさんは、歳の離れた三人人に強引な結婚を申し込まれた。両親共々強硬に拒否したが、後日、外出したところを連れ去られた。カズちゃんは必死で追いかけたが、追い付かず、取り戻せなかった。一徳さんにとっては、一代の痛恨事だった。鹿児島から博多に拉致されたイワイさんは、その後、幼いフクちゃんを抱えて婚家を飛び出した。

突き出た頬骨になめし革の赤らんだ皮膚がピツと張りつめた顔。頑丈そのものの体軀。結婚前、町野で一度だけ一徳さんを見た時、私は満州浪人とか馬喰とか活字の上だけで知っている、ウロンな人々をイメージした。竜一郎さん、居候の土持さん、土持さんの姪の行儀見習いの洋ちゃん（洋子）一徳さんの四人で（しえからしか しえからしか）と合いの手のように連発しながら、埒もないことで盛り上がっていた。

結婚後、町野でカズちゃんと一度だけ行き合わせた。夫は彼と、盤は櫃の木だったか忘れたが、那智黒、白蝶貝の石で碁を打った。

「カズちゃんて どんな碁」夫に聞くと
「こつちで形勢が悪くなるとぼつと素っ頓狂な場所から始めるんだ。いい加減そつちで打ってて忘れた頃合いを見計らって、元の所に戻るんだ」と苦笑する。

何事につけ自分なりのうるさい意見をぎらつかせる一徳さんは、内心は、ヒトカドの人物と自負しているに間違いない。また、自分を風流人、自然児、野人、賢人、世捨て人、それらを少量づつ掻き混ぜて、自由人との気概を懐深く忍ばせていたのではないだろうか。一方で、腹の座った生活者でもあった。

プリマハムへ京浜急行で通勤していた一徳さんは、途中下車し、肉を抱えて横浜の家に現れるようになった。相手を考えず愛想を振りまくのを（札幌正しい）と混同している母が、カズちゃんと町野で遭遇した際「横浜へもぜひ」などとやったのではないだろうか。料理をチョイとつまみ、お酒をちびちびやりながら、彼の眼目は、一方通行の大おしゃべりに尽きた。

一徳さんの逗子の家に、一家で蛭狩りに誘われたことがある。その時、神武寺の駅に向かうイワイさん姉妹と送りがてらの一徳さんに行き会った。イワイさんに会ったのはこの時と義兄の葬儀の二回しかない。

一徳さんは、谷戸の入り口のお百姓さんの家作、四戸入ったアパートの一階に住んでいた。前は谷戸の奥まで田んぼが続く。縁側付きの裏庭には、カズちゃん丹精の花壇の花々、が夏の日差しに戦いでいた。一徳さんはこの部屋を庵とみたてて、風流気分て棲みなしていたのではないだろうか。田舎育ちの父ははしゃいでいた。カズちゃんはカシワと呼んでいたが、美味しい鶏の炊き込みご飯を御馳走してくれた。陽が落ちると、いよいよ前の田んぼを舞台として、蛭の乱舞である。華やかでどこか哀しい。哀しいが人ごころを誘う。昔、横浜にも蛭がいて、押入れに放したりした。あの

ツンと生臭いような澄んだ匂いは蜜だったのか、押入れそのものだったのか。

もう一度は秋。結婚前の夫もいっしょだった。谷戸のどん詰まりの登り口は、低い山へと繋がっている。小学校の遠足で行った鷹取山へも続いているかも知れなかつた。山遊びをした帰り際、谷戸への入り口に、柿の木が実をたっぷり付けていた。夫はいい処を御披露したくなつたのか柿の木に足を掛けた。

「柿は危ないよ。ボキッと枝ごといくからね」カズちゃんの声をかける。夫は実が沢山ついた小枝を木に跨つたまま、ギャラーリへ投げた。

「やっぱり 彼は若いのね」と母が声を上げる。竜一郎さんとすぐ比較したがる母が鬱陶しい。いまひとつ煮えきららない、結婚に前向きにならない私が、母ははがゆく、恨めしい。

母が仏事を仕切っていた頃法事は、以前一家がその門前町に住んでいた弘明寺で行われた。弘明寺は横浜で最も古いお寺とされ、階を上がると赤い仁王門がある。本堂の外陣に重要文化財、十一面観音が薄暗く立っている、灯りのささぬ厨子の内、丈高い有名な平安仏は、子供の私には唯の虫食いの棒杭にしか、見えな

かつた。弘明寺は喰いっばぐれの頭を剃りあげ、衣を着せて鈴（リン）を持たせ、托鉢やお布施に檀家回りをさせている評判だった。

「乞食坊主を飼っているって言われてる」

「二年間と取り決めたはずのお布施なのに、こちらが言い出さなければいつまでも取りに来る」と母が嘆く。

「住職のカンカイさんは俗っぽくて」らしい。私の「火渡り 熱くないんですか」の問いに

「パンツを履かないのがコツでね」と悠然たるもの。

ある時から精進料理を始めた。お斎も寺でと母はカンカイさんに頼まれた。

一族一同集まつての法要の後、

「お膳の支度ができるまで、集蔵館へ」と下働きの僧に渡り廊下を蔵へ導かれた。

土蔵の入り口に一m位の高さの両端を切った木が置いてあり、僧が

「一本の木より陰と陽のお印が共に生じました、大変貴重なものでございます」

貴重かどうかは個人の判断だろう。

「こちらは大奥のお女中方が淋しい折に使用されましたお道具でございます」浅い木箱の横の把手を回すと、箱の中の台に取り付けられた滑らかなすりこ木状

の物が、動く仕掛けになっている。大奥という秘密のペールの触れ込みがミソなのである。
横七十cm縦五十cm位の絵を指して

「浮世絵は本来上下の続きになっておりまして、上はこの通り何気ない男女の絵でございますが。下半分を拡げますと、はい、こうした絵柄になっております」
大物、細物取り混ぜて、総てH系の膨大なコレクションだった。

法事の度にコレクションはもう一、二回見させられが、そのうち精進料理は中止になり、弘明寺での法要と墓前での墓経だけで、お清めはレストランになった。

母の代には、カンカイさんと副住職揃っての法要だったが、母が亡くなり、妹の代になったとたん、副住職一人だけの経に変わり

「お布施はちゃんと包んだ心算だけど、少なかったのかしら」と妹を嘆かせた。

その後、弘明寺にも行かなくなった。そして、お墓参りとレストランに簡略化された。

ここで重宝されたのは、毎朝、先に逝った人たちへお経をあげている一徳さんである。まず内容不明ではあるが、堂々たる墓経を唱え、次に皆がお線香を供えている間、経を上げ続ける。大役である。本職並みに

上手なお経に聞こえた。

「妙ちゃん 香典 包まなくてもよからうか」

「うん ゆっこには話とくから。それがいいよ」

一徳さんの懐の淋しいことは知っていた。彼の年金額をたまたま見る機会があった姉が

「すっごくすくないのよ。七万円位なのよ」

鹿児島で、向こう見ずにも婿養子に入った一徳さんは、娘を置いて婚家先を飛び出した。姉、弟と斜め一直線の人生の歩きっぷりが似ていなくもない。

その後、己一個を頼みにして転々（好き勝手）の生活だったらしい。北海道にも長くいて本人いわく、さんざ海、山を荒らし廻ったらしい。自然に関する知恵と知識には頭を下げさすものがあつた。

義兄の葬儀の一、二年後だったと思うが、

「町野のお姉さんと土持さんは、その後どうなってる？」と一徳さんがねちっこく、電話で、明らかに鎌をかけてきた。

「いやね、洋子が頻りにおかしい、おかしいって言うてくるもんだから」から始まって、ああだこうだとしてこくせば詰まった妄想を妄言する。町野の行儀見習だった、土持さんの姪の洋ちゃんは義兄の世話で結

婚し、彼と同じ神武寺に住んでいた。

私は辟易して

「誰もなんにも言つてこないよ。だいたい、今、姉なんか仕事と家といっぱい いっぱいでしようが」

しかし、私は思い当たらぬでもなかった。義兄が入院して、町野も秦野も実家に集まった時、食卓で、家に帰つてどこか飲みに行きたい土持さんが（飲酒運転で軽く事故つてから、運転前に飲まなくなった）私の隣にいた姉に

「そろそろ 帰ろうか」

その、綿あめみたいにふんわり甘い言い方、姉へ投げたまなざしに、（エッ！ソーなんだ）カズちゃんのごり押しの尋問はなんとか振り切つた。

祐くんの結婚生活が落ち着いた頃、姉の身边を少しでも賑やかにしようと、五月の連休に町野と横浜に秦野に来てもらう、バーベキュー大会を始めた。

正月には、篠崎の方の姉妹一家が我家に集まる。

五月は、子供世代が結婚したい人は次々にして孫世代が形成され、ある時、妹が数えたら、参加者二十六人だった。彼等は鱒釣りに行つたり、川遊びに興じたり、幾つか公園廻りをしたり、田舎の一日を過ごす。祐く

んがバーベキューの肉を持ち込むにしろ、それだけの人数の昼と夜を手作りで用意するのは、メニュー作りからして大変で、正月と連休前に私は鬱っぽくなる。

土持さんが来るので、一徳さんも呼ばないと、バランスが取れない。二人でバトルをやつて、他の人に迷惑をかけないで欲しい。

それが彼が秦野に来始めたきっかけだった。

五月の集まり以外に一徳さんは、三度一人で泊まりに来た。一度目は

「妙ちゃん性格がよかもんねえ」としきりに感心する。彼にとつて都合の良い性格なのだろう。

「はあ 性格がいいですか」夫は浮かぬ顔。

カズちゃんは夜中の二時になつてもしゃべり止まない。私は隣室で布団に入っている何事も杓子定規、だらしがないことが大嫌いな夫が、もしか、起きていて煮えくりかえっているのではと、気が気でない。後日、長女の男の学友が夏休みに泊まりに来た時、十二時近くまで皆でランプで盛り上がっていたら

「遅い。もう寝なさい」夫に怒鳴り込まれた。

翌日は一徳さんの案内で、ちよこつと丹沢に入った。昼食時に川に出る計算を彼はしていて、三人の子供た

ちを指示して流木を拾わせ

「川に休んだら 火を焚かんとね」

そして、カズちゃんの握ったオニギリを食べた。オニギリを丸くしか握れない私を笑い飛ばして、彼は綺麗な三角を作った。

若い男女の心中の地の古い石碑を見たのは、このハイキングだったのではないだろうか。

何年後かの二度目は、北海道の友達に蟹を送らせたので、持つて行くと言う。私はいつも、来るなら土曜日にしてと、釘を打っていた。

今日じゃないと折角の蟹がと、押し切られた。カズちゃんは今までも、自分で農業した収穫物を自慢タラタラ、手前味噌たつぷり付きでござり送り付けてきた。里芋、すなっぷえんどう、ブロッコリー、冬瓜とか。送料もばかにならない。カズちゃんの懐を慮って、お札の手紙に時に札を忍ばせた。漁協が撒いたらしい稚貝をシーズン前に盗掘したらしい、蜆より二周り大きい位の浅利を、これまた大量によこして、私を途方にくれさせた。裏山で掘り上げた自然薯は纏めて櫨の葉で包まれ、油紙は縋った藁で風流に括ってあった。千両や紫式部、特に岩タバコは岩ごと鉢に美しく納まりかえていた。何事も小奇麗に仕立てるセンスを持

ち合わせていた。自然児のカズちゃんには盗掘の意識が欠けていたのではないだろうか。

四時ごろ。一徳さんは台所に直行した。

「さっきまで動いていたからねえ」おがくずの中から毛蟹をすくい上げる。おがくずを洗い落とすと解体にかかる。料理鉢は拒否された。好きにさせようと、私は居間に退いた。しばらくして

「おっきな皿を二枚だして」

シンクにはバラバラにされた蟹たちが散乱していた。とろりと白い身があだつぽく殻からはみ出したりしている。

「最高だからねえ。ここのこの時期の蟹は。いや、これ食べたら他所の蟹は蟹じゃないよ。ほら、舐めて」一徳さんは蟹まみれの指を突き出した。私はウツとなつたが、舐めた。

お風呂の後真っ白い下着姿で過ごしていた彼は、すんなり寝室へ入り、ヤレヤレ一安心した。

翌朝、夫は会社に子供たちは学校へ、一徳さんはお茶しか乗ってない食卓にグズグズしている。駅まで送るつもりの夫の言葉も断っていた。私は食器を洗い終えてしまったので、次は新聞を読みたい。

「お茶替えますか」台所から声をかけると、おしやべ

りが始まった。ヤレヤレ、食卓に座った。顔の皺予防の話なんかしている。

「クリーム塗って。ほれ、こうやって」掌を顎からこめかみへ何度もすべらす。目がおかしい。突然クイツと私へ手を伸ばして来た。サツと避けた。何事もなく彼はおしやべり続ける。そして、帰っていった。

翌日、電話をよこし、妙ちゃん僕を騙したとかグズグズ言う。ずっと前に一徳さんがフィリピン沖で撃沈され、何時間も海を漂った話や、慰安婦を買った話（お金、多分軍票を払う）をした際

「女の人の中って、けっこう違うもの？」

「いやそんなことありやせん。皆同じよ」とかの会話が彼に錯覚させたかもしれない。カズちゃんは八十近かったと思う。

義兄の葬儀の際も、騙したと非難された。

三度目は、翌朝大山に登る一徳さんを夫が蓑毛まで送って行った。

「何もいらなくて持って行かなかったけど、カズちゃんお昼どうすんのかしら？」

「お昼まえに戻るつもりだよ。きつと」蓑毛と大山の山頂の往復は、普通一日仕事である。しかし、本当に

お昼まえに家まで帰って来た

「いや いや上の方は岩がゴロゴロしよるねえ。いや大変なこと」大変でもなさそうだ。

何も言わずに機嫌よく帰っていったが、実はカズちゃんは大山で足を捻っていたのだ。自分で治す主義で若い頃は通せたのだから、後々まで引きずる怪我になつてしまった。

さらに、帯状疱疹をこじらせ、医者に診せた時には手遅れ、ひどい神経痛が残ってしまった。

その後、一、二回は五月の集まりに顔を出して、イタイタイと宣伝していたが、その後は電話の遣り取りだけになった。

風流心だけは枯れないとみえて、筆ペンでさらさら書いた短歌何首かをしたためた手紙が時々届いた。

ここに、二〇一〇の年賀状がある。右下の隅に二月十日の秦野局の消印がある、一徳さんの年賀状。受け取った時は今頃何かと色めいたが、六四六―七の住所が六一四六―七になつていて局預かりになつていたと考えられる。いつもの筆ペンでもなく、フニヤクニヤした字が、美意識過剰の格好を附けたがるカズちゃん

んらしくない。おまけに、(妙ちゃん 妙ちゃん)と呼びながら郵便にはかならず好子と書いて来ていたのに、妙子になっている。

(小生八九才 歳々年々人同じからずの心境です 急ぐ旅にはあらぬと思えど)

その春、電話を入れたが出なかった。後日の電話は(使われておりません)に変わっていた。

「脑梗塞おこして 鹿兒島に帰ったみたいよ」姉が言う。以前から

「そろそろ帰って来いと、鹿兒島の兄が言っている」と、思案していた。

一徳さんから突然電話をもらったのは翌年だった。(鹿兒島の施設に入っている。電話番号を伝えるから書き取って)短い電話だったが、心配する程でもない様子である。携帯の番号だった。

そして、一か月後にした電話の応答は(使われておりません)

一徳さんの消息について

「カズちゃんの兄さんに聞けば分かるんだけどね」と最初は言っていた町野の姉も、兄さんに電話をする

気はまったくゼロ。

何年も前に、イワイさんは統合失調症の娘フクちゃんの放火で焼死してしまった。そして、病院に収監されたフクちゃんを鹿兒島へ送るお膳立てを、一徳さんや、東京のイワイさんの妹を飛び越して姉が仕切つてから、姉と兄さんの家は気詰りな関係に陥つたらしい。損なだけの役回りを、姉のほっておけない世話好きから、かつて出たことも知れない。あるいは、フクちゃんの押し付け合いからの兄弟の悪化を姉は未然に防いで、自ら悪者になったのだろうか。しかし、姪とはいえ放火犯を引き取るのは、枕を高くして寝られない、覚悟の上に覚悟がある事態である。

一徳さんの携帯からの電話を受け取ったのは、私人だと知ると、宙ぶらりんになってしまった消息が、気になってしょうがない。何か、遺言を託されような、紙くらいの重さを今も掌に感じる。